



マツケンと十次

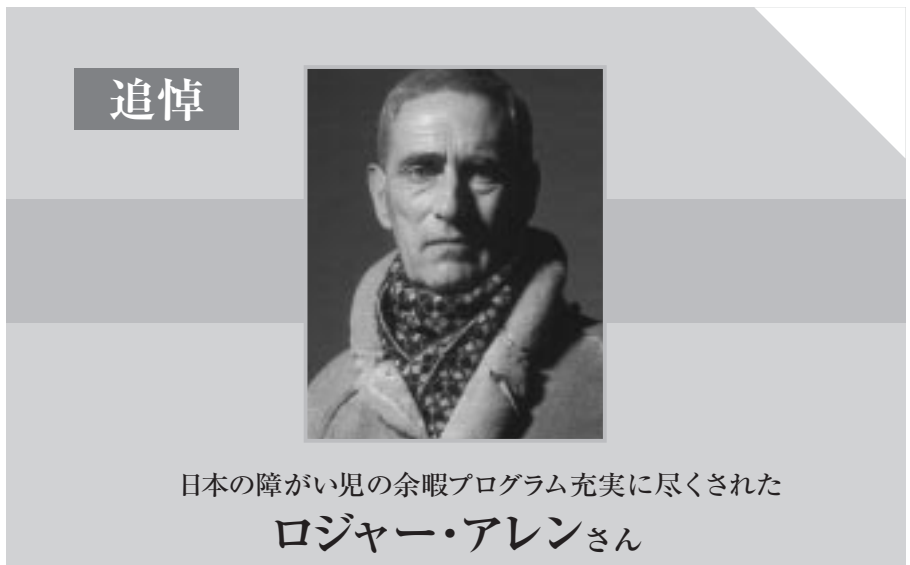
少し時期はずれの話ですが、40%の視聴率を切ったNHK紅白歌合戦の中で、瞬間最大視聴率を取ったのがマツケンこと松平健さんでした。私たちの世代には、松平健と言えば「暴れん坊将軍」でしたが、いまや「サンバの健さま」になってしまいました。

その松平健さんが主役を演じている「石井のおとうさん ありがとう」という映画(現代ぶろどくしゅん製作)が話題になっています。明治から大正初めにかけて、孤児救済に生涯を捧げた石井十次の物語です。倉敷の大原美術館を創設した大原孫三郎に大きな影響を与え、日本の児童福祉の父とも言われる十次ですが、福祉分野で働いている一部の人が

ちや地元岡山を除きあまり知られていません。十次が開いた岡山孤児院には、もっとも多いとき1200人も孤児がおり、それを私費で寄付だけできなかったというのですから、私たちの想像を超えたスケールの大きな社会事業家です。また、キリスト者として伝道に熱心だった十次は、岡山大学YMCAの設立に際しても孤児院の土地を提供するなどして積極的に関わっています。

このほど、試写のため広島YMCAを訪れた製作総指揮・監督の山田火砂子さんは、十次のあまりの知名度の低さを嘆いておられましたが、今回、マツケン人気のお陰でこの映画がクローズアップされ、十次の生き方にスポットが当たるのであれば素晴らしいことだと思います。監督の願いは、「親のない孤児よりも、もっと不幸なのは心の迷子、精神の孤児なのです」という十次のメッセージを現代に伝えることにあります。

映像が社会に大きな影響を与えることを「冬ソナ」はあらためて証明しました。岡山YMCAが製作に協力し、日本YMCA同盟推薦のこの映画を、石井十次を知らない多くの人に見てもらえるよう、私たちが協力しましょう。(広島YMCA総主事 下坊和幸)



日本の障がい児の余暇プログラム充実に尽くされた
ロジャー・アレンさん

FCSC (YMCA国際賛助会)の副会長を務められていたロジャー・アレンさんが心不全のため2004年12月14日に神さまのもとに召されました。享年59歳でした。

アレンさんは、1985年にFCSCのメンバーとなり、その尽きることのないエネルギーと周囲の人々へのわけ隔てない熱意で今日まで会長や運営委員という立場でFCSCを率いてこられました。特に各国大使館でのチャリティーコンサートやダンスパーティーの実施・運営においては、アレンさんの妻バーバラさんと共に献身的に尽くされました。

アレンさんは約30年間にわたって日本に滞在され、企業家として非常に成功をおさられました。また、近年は俳優やファッション誌のモデルとしても活躍されていました。一方で、FCSCのメンバーとして、特に、障害のある子どもたちに心を寄せ続け、障がい児プロ

ラムの充実・発展のために精神的に働かれたことが、多くの人々の心に焼きついていてます。

また、東京在住の外国人コミュニティのなかでも、アレンさんの才能と人々への奉仕の精神、家族や友人への愛情が、人々の尊敬を集め、多くの人々が親しみを感じていました。

東京・芝公園の聖アンデレ教会(聖公会)で行われた葬儀には、総勢300名を超える人びとが集まりました。中にはアレンさんの故郷である英国をはじめ、数カ国の大使も参列をされ、生前のアレンさんが国際社会において多くの貢献をされてきたことが印象づけられる式典となりました。

これまでFCSCメンバーそして日本社会の一員として、YMCAの活動を支え、励ましていただいたロジャー・アレン氏に心から感謝と哀悼の意を表します。

みんなの力でケセルンジャー!

岡山における落書き対策とYMCAの働き

岡山YMCA 太田直宏



落書きは街の悲しい叫び

「おはようございます」「先日はありがとうございました。最近、YMCA周辺の方がたからよく声をかけていただくようになりました。そのきっかけは、岡山市の中心市街地にあるYMCA周辺での落書き調査・消去活動にあります。本物体験を通して子どもたちを育む目的で実施している「YMCAウエルネス倶楽部」の例会、瀬戸山陰のワイズメンズクラブ、YMCAで共催した「おいおいフォーラム」、YMCAが事務局と



作業は、消去班、塗班、機動班などの各班に分かれ、完全分業体制で行う

なって地域の諸団体とともに中高生百人を集めて実施した「ボランティアフォーラム」(助成・中央青少年団体連絡協議会など)によって、この数年間実に多数の落書き対策の実績を積んできた結果が、良い評価となつて定着してきたのです。

NHKの番組「難問解決」近所の威力」でその惨状が取り上げられたほど、岡山市は「日本一の落書き都市」と言われていました。

私たちが活動を共にしている岡崎久弥さんは、そのような状態を憂慮し、「落書き調査隊」を組織し調査活動を行いました。その結果、都市の空洞化・高齢化による地域の自治能力の低下と街への社会的無関心の増大が、さまざまな「スキ」を生み、それが落書きとして目に見える形となつて現れ、重犯罪の温床となつていくことがわかってきました。落書きは、放置され疎外された街の悲しい叫び声だったので。

人びとの連携で街づくり

「この叫びを放置してはいけません。岡崎さんの調査に応じて、YMCAを含む多くの市民が動きだしました。そして、今や岡山市は人々が協力して喜んで落書きを消しをする「落書き対策先進都市」と呼ばれるまでになりました。それを裏づける「岡山方式落書き一斉消去」と称されているノウハウは、元はといえば、落書き調査隊と共に活動した町内会の会員や、子どもたち、ボランティア、警察官、自治体職員、マスコミ関係者に至るまでの広範な市民が、全身ベんキまみれになりながら、試行錯誤のなかで生み出した「近所の知恵」なのです。この間、岡山県知事・岡山市長にも働きかけ、活動に参加していただいたことで、行政もこの妙案を評価し、二月には岡山県の予算で「岡山方式」

あなたが住みたいのはどんな町ですか? 便利だけれど人と人のつながりが少ない町ですか。それとも、困ったことについて話し合い、協力し合える人間関係のある町ですか。子育て、ゴミ、防犯など、一人・一家族の力だけでは解決できない日々の生活に身近な問題に、できることから取り組むこと、仲間と一緒に考え、行動することによって、人は真にその地域の住人になっていくのではないのでしょうか。そして、「そこで生活している」という確かな実感は、人の、特に子どもたちの心を強める力がある、とYMCAは考えています。YMCAには、全国の86カ所に地域活動センター・ボランティアセンターがあり、地域づくりの拠点になっています。今号では、他のNPOや行政と協働しながらよりよい町づくりをすすめているコーディネーターとしてのYMCAの活動事例をご紹介します。

自分たちでつくる「地域」

特集



落書き消去は、調査から始まる。膨大な数の落書きを一つひとつ写真に収め、それらを書き込んでつくった地図をもとに作業する

落書き一斉消去マニュアル」が発行されました。また「らくがき戦隊ケセルンジャー」というご当地ヒーローも生み出されました。このことを仕掛けたのも「アトリエはらっぱ」という私たちの仲間のNPO法人です。地域が連携して街づくりを行っていく、そんな風土が岡山に今、生まれつつあります。

地域の再生は「心」を育む

活動を行ってきた中で、二つの発見がありました。ひとつは、この作業を通して、地域のつながりが再生していくということです。事前調査は言うに及ばず、落書き消去活動には、予想以上の手間がかかりました。しかしその手間をおかして、地域の方がたや市民団体、行政との交流が生まれ、顔が見え、痛みを共有する関係が再生してきたのです。

もうひとつは、この活動が、子どもや若者の生きる力を育むきっかけになるといことです。傷ついた街を汗を流して修復した結果、街が回復し、たくさんの人たちが喜んでくれるという現実を青少年は目のあたりにします。そのことは彼らの中に「自分たちは、微力だけれども、無力ではない。主体性をもって行動すれば、力を発揮することができるのだ」という気

めに情報収集に努めること。つまり自分自身が問題意識と課題解決への希求心を持っていること。

⑤ 人と人を紹介し結びつけること。によって連携の輪を広げていくこと。また、ネットワークの結節点となるキーパーソンを見いださる、ネットワークを大切にする。

謙虚に、自己を空しくすることによって、相手や関わる人の力が発揮されること。

ネットワークが育んだもの

現在は、「NGO・NPOネットワーク」とやま」の事務局はNPO法人「PTOOL」が引き継いで、年一回のボランティアネットワークパーティー、NGO・NPOフォーラムの運営、富山市ボランティアホームページの制作委託、災害ボランティアネットワークの設立、富山県新任主任職員研修会協力、富山県主催NPO研修会の運営などさまざまな事業を実施しています。富山県



新潟・中之島町の水害にボランティアが駆けつけた

づきを芽生えさせるのです。それはこれから市民として、地域社会を担って生きることの大切さを自覚する第一歩となります。地球規模で既存のシステムが破壊されているからこそ、今それぞれの現場で、自分たちの足元の問題に対して、地域の人びとと協働し、新たな仕組みを構築することが求められています。そしてそこでは

ネットワークが地域を変える。

私が変わり、町が変わる。

富山YMCA 総主事 島田 茂

二〇〇〇年八月一日、富山YMCAが事務局となり「NGO・NPOネットワークとやま」を設立しました。約四十のNPO・NGOが互いに顔の見える横断的なつながりをつくることで、地域や世界で起きているさまざまな課題により有効に取り組むために、これまで月一回の割合で会合を開き、富山における市民活動の活性化に一役買ってきました。

「NGO・NPOネットワークとやま」設立の背景

そもそも、市民活動をしている人は地域の中で孤立しがちでした。富山弁で「みゃあらくもん」つまり、「変わった人」というふうには言われることがあります。行政や役所といった「お上」に働きかけるのは「敷居が高い」「何を言っても無駄だ」というような諦めともいえるムードがあり、市民活動をしている人にもその意識は少なからずあります。福祉活動、



ピースウォーク in とやま

NPO・ボランティアガイドライの作成にも関わり、NGO・NPOと行政、企業、そして、学校との協働のコーディネーターとしての役割を担いつつあります。また、「アースデイとやま」や「ピースウォーク in とやま」などの市民活動の活性化にもつながり、着実な成果をみせています。

ボランティア、NPO元年と言われた阪神淡路大震災から十年、YMCAは、世界で最も古いNGO・NPOとして、市民が自らの地域を民主的に住みよい町にしていく市民社会をつくるために、長い歴史の中で培ってきた人材育成やコミュニティづくりのノウハウを生かして、これからの地域のNGO・NPOワークの育成に貢献していきたいと思ひます。